

## フロンティアスク - ル用報告書

都道府県名 広島県

## 学校の概要(平成15年4月現在)

|     |           |     |     |      |     |     |
|-----|-----------|-----|-----|------|-----|-----|
| 学校名 | 三原市立第五中学校 |     |     |      |     |     |
| 学 年 | 1 年       | 2 年 | 3 年 | 特殊学級 | 計   | 教員数 |
| 学級数 | 3         | 4   | 4   | 0    | 11  | 22  |
| 生徒数 | 119       | 145 | 129 | 0    | 393 |     |

## 実践研究の概要

## 1 主題(テ - マ)

|  |
|--|
| 「確かな学力向上を図る指導体制・指導方法の工夫改善」<br>～ 習熟度に応じた指導を通して～ (平成14年度)<br>～ 習熟度に応じた指導ならびに教科指導を通して～ (平成15年度) |
|--|

## 2 研究内容与方法

## (1) 実施学年・教科 (この研究主題を設定した本校の実態や課題)

## 【平成14年度】

平成14年度から新教育課程に変わった。選択教科の内容やあり方、総合的な学習の時間の内容創造に視点をあてた指導体制・指導方法の工夫に力点が置かれていた。この過程で、確かな学力向上(基礎学力の定着)という点に注ぐ力がややもすれば薄れがちであったと言える。

そこで、選択教科・総合的な学習の時間・必修教科等に対し、どのように指導体制を組み、どのように指導すれば生徒の学力つくりのかを学校課題として研究をすることにした。

## 【平成15年度】

平成14年度の研究をもとに、その継続と焦点化を図る目的のもと、2年生と3年生の選択授業(2年生での音・美・技・家・体に対する学ぶ意欲と学んだ力の向上)、1年生・2年生の習熟度別指導(前年度の研究継続)、全ての教科における学力向上(担当教科・学年に全職員が関わって行くため)を行うことにした。

## 【平成16年度】

平成14・15年度を踏まえ、焦点化を図りつつ研究を推進する。2年生と3年生の選択授業(2年生での音・美・技・家・体に対する学ぶ意欲の向上と3年生での国・社・数・理・英に対する学んだ力の向上)、1年生・2年生の習熟度別指導(前年度の研究継続のため)の方法とその効果 全ての教科における学力向上を図る指導方法の工夫・改善(担当教科・学年に全職員が関わって行くため)を図った教科の単元事例の開発を行うことを予定している。

## (2) 年次ごとの計画

## 【平成14年度】

## 1) 研究テ - マ

「確かな学力向上を図る指導体制・指導方法の工夫改善」  
～ 習熟度に応じた指導を通して～

## 2) 研究仮説

確かな学力向上に向けて少人数による指導、選択教科の多様化、補充的な学習・発展的な学習の充実等学習のあり方を工夫するとともに、生徒個々の理解や習熟の程度に応じたきめ細かい指導を実践すれば学力は向上するであろう。

## 3) 研究内容

少人数・習熟度別指導等のきめ細やかな指導による学力向上  
選択教科における多様なコ - スの開発(補充的な学習・発展的な学習)  
シラバスの作成と単元ごとの評価基準を作成し、指導と評価の一体化

#### 4) 取り組み方法と過程

研究組織の確立と保護者への説明と協力要請  
研究に関わる情報収集（事例収集、先進校視察）  
校区内小学校との連携  
少人数・習熟度別指導の実践と学力向上（1年生）  
選択教科の多様化のあり方を実践（2, 3年生）  
補充的な学習のための教材作成  
教科シラバスの作成による授業実践  
観点別到達度調査の実施と分析  
公開研究会の実施

#### 5) 学力向上のための方策

##### 習熟度別指導

中学校1年生の特定教科（国語・数学・英語）において、30人以下の少人数授業によるきめ細かな指導を行い、基礎学力の確実な定着を図ることをねらいに習熟度別指導を推進した。

本校では、これを受けて次のような方法と内容を持って実施している。

##### A、方法

国語（1クラス2コ-ス）

|      |   |            |            |
|------|---|------------|------------|
| 1年1組 | → | 1年1組A（17人） | 1年1組B（18人） |
| 1年2組 | → | 1年2組C（18人） | 1年2組D（18人） |
| 1年3組 | → | 1年3組E（17人） | 1年3組F（18人） |
| 1年4組 | ⇒ | 1年4組G（17人） | 1年4組H（18人） |

\* 10月末まで同人数、ランダムによるコ-ス分けで学級を2コ-スにして指導する。

数学・英語（2クラス3コ-ス）

|        |   |              |        |   |              |
|--------|---|--------------|--------|---|--------------|
| 1年1・2組 | ┌ | 1年1・2組A（24人） | 1年3・4組 | ┌ | 1年3・4組D（24人） |
|        |   | 1年1・2組B（24人） |        |   | 1年3・4組E（24人） |
|        |   | 1年1・2組C（23人） |        |   | 1年3・4組F（23人） |

\* 10月末まで同人数、ランダムによるコ-ス分けで学級を2コ-スにして指導する。

##### B、内容

国語は1学級2コ-スで非常勤講師と本務者の計2名で教科運営を行ってきた。特に教科の指導内容や進度や試験等と同じにするため協議を行いつつ進めてきた。11月からは、学習内容に生徒の習熟の状況を取り入れて基礎コ-ス（25名位）と基礎ゆったりコ-ス（20名位）に分けて指導を進めることにした。

進度や試験の内容については同じにし、学習内容は、学習の定着を図る時、より基礎的な問題とする者と発展的な問題をする者との違いを設けて指導をすることにした。

数学では、2学級3コ-スで非常勤講師と本務者2名の計3名で教科運営を行ってきた。11月から基礎コ-ス1クラス（29名位）と基礎ゆったりコ-ス2クラス（21名位）に分け、授業進度と基礎基本は同じように進め、概念定着の練習において基礎的な問題とする者と発展的な問題とする者との違いを設けて指導を進めることにした。

特にプリントを單元ごとに準備して指導に当たっている。

英語では、2学級3分割で非常勤講師と本務者2名の計3名で教科運営を行ってきた。11月から基礎コ-ス1クラス（29名位）と基礎ゆったりコ-ス2クラス（21名位）に分け、授業進度は同じように進めるが、進度の途中で単語の繰り返しに力点を置いたり、文型に力点を置いたりすることで、指導内容に違いが置かれている。また、ドリルでは、授業の強調点にあったものが扱われ、自ずと違いができていく。

##### 少人数指導

本年度指導工夫改善加配で3年生の数学を少人数指導をすることにした。

##### A、方法

数学（1クラス2コ-ス）

|      |   |            |            |
|------|---|------------|------------|
| 3年1組 | → | 3年1組A（19人） | 3年1組B（18人） |
| 3年2組 | → | 3年2組C（19人） | 3年2組D（18人） |
| 3年3組 | → | 3年3組E（19人） | 3年3組F（18人） |
| 3年4組 | → | 3年4組G（19人） | 3年4組H（18人） |

\* 学級を習熟度によらないで、2分割して指導する。

##### B、内容

学習進度は同じ、概念形成に関わる指導は教師個々の考えで進める。学習内容の定着に関わっては、プリントを用意し、個の力で自由に解かせるようにした。プリントを行っていく過程で教師が生徒個々に対し、分からない所を個別に指導するようにした。

## 選択教科における多様なコースを開設

選択教科の多様なコースの開設を考え、講座開設に関わる基本姿勢として、次の4項目にした。

可能な限り多様な講座を開設し、生徒が自らの判断で自分の課題に迫る講座を開設する。

基礎・基本の徹底と、課題解決学習や発展的な学習ができるような講座を開設する。

前・後期の二期制とし、生徒が適正などを考えて選択する。履修に偏りがないように配慮する。

全教職員で選択に関わり、各学年次のような教科を開設することにした。

1年生：美術、音楽、体育A・B、技術、家庭

2年生：国語、社会、数学、英語、美術、音楽、技術、家庭

3年生：国語、英語A・B、数学、音楽、技術、社会A・B、家庭

### A、本校の選択教科と総合的な学習の時間の年間授業時数の位置付け

|      | 選択教科の時間数 | 総合的な学習の時間の時間 | 合計時間数 |
|------|----------|--------------|-------|
| 第1学年 | 30       | 70           | 100   |
| 第2学年 | 70       | 85           | 155   |
| 第3学年 | 140      | 95           | 235   |

### B、選択教科の形態

ア、1年生（美術、音楽、体育A・B、技術、家庭）

|      | 前期日程（4月～9月後半） | 後期日程（11月～3月後半） |
|------|---------------|----------------|
| 1・2組 | 美術、音楽、体育      | 技術、家庭、体育B      |
| 3・4組 | 技術、家庭、体育B     | 美術、音楽、体育       |

イ、2年生（国語、社会、数学、英語 / 美術、音楽、技術、家庭）

|      | 前期日程（4月～9月後半） |             |
|------|---------------|-------------|
|      | 1時間目          | 2時間目        |
| 1・2組 | 国語、社会、数学、英語   | 美術、音楽、技術、家庭 |
| 3・4組 | 美術、音楽、技術、家庭   | 国語、社会、数学、英語 |

学校は、週2時間選択教科を開設し、生徒は前期に1時間目と2時間目にそれぞれ1教科選んで受講する。後期は、前期で選択しなかった教科より選び受講する。

ウ、3年生（国語、英語・、数学 / 音楽、技術、社会・、家庭）

|      | 前期日程（4月～9月後半） |              |
|------|---------------|--------------|
|      | 1・2時間目        | 3・4時間目       |
| 1・2組 | 国語、数学、英語・     | 社会・、音楽、技術、家庭 |
| 3・4組 | 社会・、音楽、技術、家庭  | 国語、数学、英語・    |

学校は、週4時間選択教科を開設し、生徒は前期に1・2時間目と3・4時間目にそれぞれ1教科選んで受講する。後期は、前期で選択しなかった教科より選び受講する。

### C、選択教科の内容

1年生においては、美術、音楽、体育A・B、技術、家庭を選択教科にし、内容は教科書を発展させたり、教科書外の内容をもとに課題的な授業を行う。

2年生では、国語は文章づくりを中心、社会科は今までの復習をもとにして基礎・基礎に力を注ぎ、数学も今までの復習に力を注いで指導し、英語はアルファベットからプリント学習に力を注いで指導する。

美術、音楽、技術、家庭においては、発展並びに課題学習に力を注いで指導している。

3年生では、国語は漢字検定を柱に指導を行い、数学はプリント（基礎から発展まで）による学習を行い、英語では1・2年の復習を主にした基礎コースと今までの学習をより発展させるコースを設けて指導し、社会科は1・2年の基礎として地理と歴史をプリントによって指導している。音楽・技術・家庭学習を行う。

#### 学力補充の実施

月曜日の6校時を学校裁量時間として学力補充を行った。各学年で学力補充を行うようにした。英語や数学の学力補充に使われることが多かった。継続的に行うには週1時間という時間は効果が薄いことが明らかになってきている。

夏休みや試験週間（試験が始まる1週間前から試験日まで）では、生徒個々の持つ課題に対応するため学習に対し効果があるといえる。特に1年生において、学習の仕方が分からない生徒にとっては大変良いものと捉えられている。

## 6) 成果と課題

平成15年度に入ってCRTテストを行っており、年度を超えたものもあるため、平成15年度の成果と課題の所で集約することにした。

### 1) 研究構想図



### 2) 取り組み方法と過程

- 研究に関わる情報収集（事例収集、先進校視察）
- 総合的な学習の時間・選択教科・必修教科の関連性をふまえた教育内容の検討
- 校区内小学校との連携
- 少人数・習熟度別指導の実践と学力向上（1、2年生）
- 選択教科の多様化のあり方を実践（2、3年生）
- 教科シラバスと評価規準の見直し
- 観点別到達度調査の実施と分析
- 授業方法研究の推進
- 公開研究会の実施

\* 平成14年度に行った補充的な学習は選択教科に含めて研究する。

### 3) 学力向上を図る方法

#### 習熟度別指導

平成15年度は、前年度の意図を踏まえた上で、中学校1・2年生の特定教科(国語・数学・英語)において、30人以下の少人数授業によるきめ細かい指導を行っている。本校では、これを受けて次のような方法と内容を持って実施している。

#### A、方法

1年生(1学級2コ-ス)

国語、数学、英語の3教科について1学級を基礎コ-スと基礎ゆったりの2コ-スに分け、6月より実施(中間試験が終わった時)

各学級 { 基礎コ-ス  
基礎ゆったりコ-ス

2年生(2学級3コ-ス)

国語、数学、英語の3教科について2学級を基礎コ-ス2と基礎ゆったりの3コ-スに分け、6月より実施。

1・2学級 { 基礎コ-ス1  
基礎コ-ス2  
基礎じっくりコ-ス

#### B、内容

1学級2コ-スの時は、非常勤講師と本務者の計2名で教科運営を行う。特に教科の指導内容や進度や試験等を同じにするため協議を行いつつ進めている。学習内容に生徒の習熟の状況を取り入れ基礎コ-ス(25名位)と基礎ゆったりコ-ス(20名位)に分けて指導することにした。

進度や試験の内容については同じ状況にするが、学習内容では、学習の定着を図る問題を練習する時、より基礎的な問題にするものと発展的な問題にするものとの違いをつけて進めることにしている。

2学級3コ-スで非常勤講師と本務者2名の計3名で教科運営を行ってきた。基礎コ-ス2クラスと基礎ゆったりコ-ス1クラスに分け、進度は変えないで、指導方法の違いを持って進める。

#### T・Tによる少人数の指導

本年度指導法工夫改善を活用し、3年生の英語で少人数指導をすることにした。

#### A、方法

学級を習熟度によらないで、学級を2分割して指導する。

#### B、内容

学習進度と基礎基本に関わる指導は同じにし、学習内容の定着に関わっては、個々の教師の裁量でプリントを用意したり、きめ細かく生徒に対応しながら指導する。

#### 選択教科における多様なコ-スの開設

生徒の学力向上を図る方法の1つとして、選択教科における多様なコ-スの開設を考えた。講座開設にあたって、基本姿勢を次の項目とした。

2年生では音1・美・技・家・体を3年生では国・社・数・理・英を選択するようにする。

教職員は学年枠を越え、選択に関わる。

その上で、2・3学年では、次のような教科を開設することにした。

2年生：美術、音楽1・2、体育、技術、家庭

3年生：国語基礎・発展、社会基礎・発展、数学基礎・発展、理科基礎・発展、英語基礎・発展

#### A、本校の選択教科と総合的な学習の時間の年間授業時数の位置付け

|      | 選択教科の時間数 | 総合的な学習の時間の時間 | 合計時間数 |
|------|----------|--------------|-------|
| 第一学年 | 0        | 100          | 100   |
| 第二学年 | 105      | 70           | 155   |
| 第三学年 | 175      | 70           | 235   |

#### B、選択教科の形態

2年生は1～4組が同時に学習する。前期と後期に週3時間(美術、音楽1・2、体育、技術、家庭)から1教科選んで受講する。後期は、前期で選択しなかった教科より選び受講する。

3年生は

|      | 1コマ      | 2コマ      | 3コマ      | 4コマ      | 5コマ      |
|------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 1・2組 | 国基、社基、数発 | 社基、数基、理発 | 数基、理基、英発 | 理基、英基、国発 | 英基、国基、社発 |
| 3・4組 | 国基、社基、数発 | 社基、数基、理発 | 数基、理基、英発 | 理基、英基、国発 | 英基、国基、社発 |

のように、週5時間選択教科を開設し、生徒は各コマから1教科選んで年間通して受講する。

ただし、同一教科は3回受けられない。

#### C、選択教科の内容

2年生では、教科を発展させる内容で扱ったり、教科の1単元を深めていく内容にした。

3年生では、国語の基礎は漢字や慣用句等言語事項を柱に指導を行い、発展は文法事項を指導する。社会科は1・2年次の復習を中心に、発展はテ・マごとに地理・歴史を学習する。数学の基礎は計算を中心にし、発展はプリントを使って学習を行う。理科の基礎は、1・2年生の復習を中心に発展は今までの学習をもとに発展的な問題を解いている。英語では1・2年の復習を主にした基礎コ-スと長文読解を中心に指導する事にした。

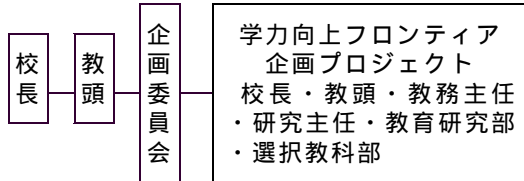
【平成16年度】

研究に関わる情報収集（事例収集、先進校視察）  
 少人数による指導、選択教科の多様化のあり方や補足的・発展的な学習の指導内容の追求と実践  
 （選択教科に学力補充を含めている）  
 観点別到達度調査の実施と分析  
 校区内小学校と連携  
 授業方法研究の推進  
 単元ごとの評価基準並びにシラバスの見直し  
 授業研究の推進  
 公開研究会の実施  
 研究のまとめ

(3) 研究推進体制

- 研究推進組織 -

校務分掌の教務の中に位置づけて推進するのが組織上では良いが、教職員全員が係わる中で、学校としての研究推進を体験する事が必要だと考え、特別プロジェクトを創ることにした。



学力向上フロンティア企画プロジェクト研究推進部はフロンティア事業に係わる研究推進原案作成及び研究推進を中心的に行う。  
 全教職員が関わる研究活動を創る。  
 週1回フロンティア推進会議を開き研究主任を中心に研究活動原案を創り全職員に提示する。

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1 研究の成果と課題

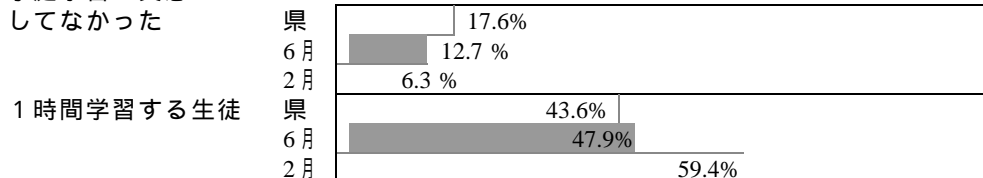
(1) 家庭学習時間、国語・数学・英語の授業に対する好き並びに分かる生徒の増加

次のグラフは平成14年6月に広島県が全県一斉で中学校2年生に行った生活実態調査を平成14年度の1年生において平成14年6月と平成15年2月に同じ内容で実施した状況をグラフにしたものである。家庭学習では2月の段階で「していない。」と答えた者が6月の段階の1/2になっており、1時間ぐらいいは学習する者が6月に比べ12ポイントも増えている。

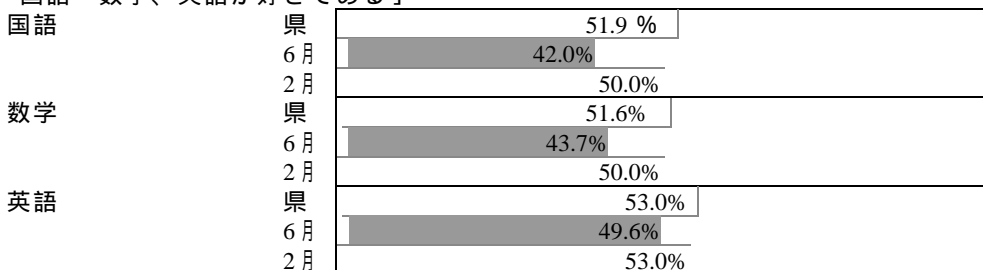
また、国語・数学・英語が好きになった者が8%、6%、3%と増加しており、分かることに対しては、国語は0.3%減少するものの数学と英語では、10%、11%増加していることが分かる。

このことは、家庭学習への指導(家庭学習内容の指示、継続性、家庭との連携)を意識して丁寧に行ったことや授業に対する取り組みで興味関心意欲を喚起する指導の工夫を各教科で取り組み始め、分かる授業を創るうとした結果がこのような数に表れたものと捉えている。

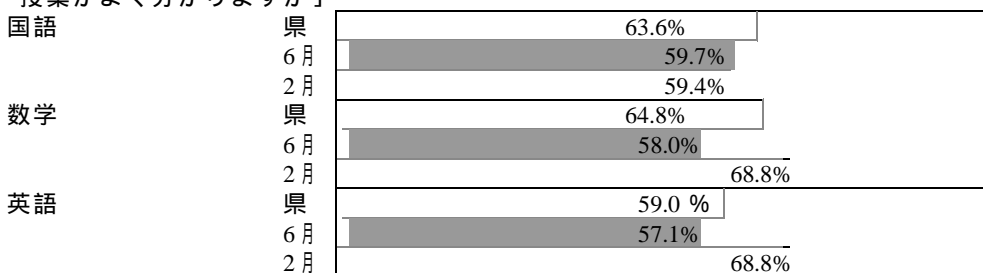
家庭学習の実態



「国語・数学、英語が好きである」



「授業がよく分かりますか」



(2) 習熟度別指導等のきめ細やかな指導による学力向上(学ぶ意欲、学び方、学んだ力)。

学ぶ意欲の向上

次の表は、平成14年4月と平成15年4月に図書文化社・情報センタ - 作成の観点別到達度学力検査(CRT)で学習の興味・関心・意欲に関わって全国レベルで絶対評価した国語・社会・数学・理科・英語の結果である。(A:意欲的である。 B:少し意欲がある C:意欲的でない)

平成13年度入学生129名(習熟は行っていない学年)と平成14年度入学生145名(習熟度を実際に始めた学年)

平成13年度入学の生徒では、英語以外国語・社会・数学・理科が約10ポイント以上前年度より増加している。一方、平成14年度入学の生徒は、国語が3ポイント増位外社会・数学・理科は10ポイント以上の増加である。どの学年も総体として興味・関心・意欲は増していることが分かる。しかし、習熟度別指導との関連はあまりないようである。

教科に対する興味・関心・意欲 観点別到達度学力検査(CRT)平成14年4月と平成15年4月 (%)

|      | 調査年   | 国語 |    |    | 社会 |    |    | 数学 |    |    | 理科 |    |    | 英語 |    |    |
|------|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|      |       | A  | B  | C  | A  | B  | C  | A  | B  | C  | A  | B  | C  | A  | B  | C  |
| 現2年生 | 平成14年 | 18 | 46 | 35 | 22 | 25 | 54 | 23 | 46 | 32 | 23 | 35 | 42 |    |    |    |
|      | 平成15年 | 21 | 34 | 45 | 33 | 44 | 23 | 33 | 38 | 29 | 64 | 19 | 17 | 33 | 40 | 26 |
| 現3年生 | 平成14年 | 10 | 34 | 56 | 7  | 21 | 72 | 7  | 26 | 66 | 16 | 27 | 57 | 22 | 32 | 46 |
|      | 平成15年 | 20 | 43 | 37 | 25 | 38 | 38 | 16 | 32 | 52 | 43 | 23 | 34 | 16 | 33 | 52 |

習熟度別指導による学んだ力の向上

次の表は、平成14年4月と平成15年4月に図書文化社・情報センタ - 作成の観点別到達度学力検査(CRT)を実施した国語・社会・数学・理科・英語の結果である。(全国平均を0とする)

平成13年度入学生(習熟は行っていない学年)と平成14年度入学生(習熟度を実際に始めた学年)のCRT結果を見ると、平成13年度入学の生徒においては、国語・数学・英語において全国平均を超えているもの前年度結果よりマイナス傾向になっていることが分かる。一方、平成14年度入学の生徒においては、全国平均より悪いものの数学においては0.1ではあるがプラス傾向になっていることが分かる。英語においては資料不足のため判断はできないが入学時の国語・社会・数学・理科の数値から考え、学習効果はあったものと推測したい。

観点別到達度学力検査(CRT)平成14年4月と平成15年4月

|      | 調査年   | 国語 |    |  | 社会 |    |  | 数学 |    |  | 理科 |    |    | 英語 |    |  |
|------|-------|----|----|--|----|----|--|----|----|--|----|----|----|----|----|--|
|      |       |    |    |  |    |    |  |    |    |  |    |    |    |    |    |  |
| 現2年生 | 平成14年 | -2 | .8 |  | -7 | .8 |  | -3 | .9 |  | -1 | .2 | .0 |    |    |  |
|      | 平成15年 | -3 | .9 |  | -8 | .5 |  | -3 | .8 |  | -5 | .4 |    | +3 | .2 |  |
| 現3年生 | 平成14年 | +2 | .9 |  | -3 | .7 |  | +2 | .8 |  | -1 | .7 |    | +4 | .8 |  |
|      | 平成15年 | +0 | .3 |  | -5 | .9 |  | +0 | .5 |  | -5 | .3 |    | +3 | .7 |  |

全国平均を0とする

習熟度別コ - スにおける生徒の学ぶ意欲と学んだ力

国語科における習熟度別指導の成果

次の表は、平成14年4月と平成15年4月に図書文化社・情報センタ - 作成の観点別到達度学力検査(CRT)を、平成13年度入学生129名(習熟は行っていない学年)と平成14年度入学生145名(習熟度を実際に始めた学年)のCRTの国語の各観点における絶対評価の結果を%で示したものである。(興味・関心・意欲ではA:意欲的である。 B:少し意欲がある。 C:意欲的でない。とし、他の観点はA:十分満足。 B:おおむね満足。 C:努力を要する)。

また、この表は基礎ゆったりコ - スと基礎コ - スでの絶対評価の(興味・関心・意欲ではA:意欲的である。 B:少し意欲がある。 C:意欲的でない。とし、他の観点はA:十分満足。 B:おおむね満足。 C:努力を要する)人数の推移の状況である。

【成果】

習熟度別指導を行った学年と行わなかった学年でともに興味・関心・態度はプラス方向に推移している。

習熟度別指導を行った学年の興味・関心・意欲は基礎コ - スにおいては基礎コ - スにおいては絶対評価のものがAとCの両極に分かれる傾向が見られる。知識・理解においては基礎ゆったりコ - スプラス方向に移動しており、理解に時間を要する生徒にとっては効果があるものと考えられる。

習熟度別指導を行った学年 観点別到達度学力検査(CRT)平成14年4月と平成15年4月 (%)

| 国語   | 調査年   | 関心意欲態度 |    |    | 表現の能力 |    |    | 理解の能力 |    |    | 知識理解(言語) |    |    |    |    |
|------|-------|--------|----|----|-------|----|----|-------|----|----|----------|----|----|----|----|
|      |       | 14     |    |    | 15    |    |    | 14    |    |    | 15       |    |    |    |    |
|      |       | A      | B  | C  | A     | B  | C  | A     | B  | C  | A        | B  | C  |    |    |
| 現2年生 | 平成14年 | 18     | 46 | 35 | 52    | 38 | 10 | 38    | 42 | 20 |          |    | 42 | 41 | 17 |
|      | 平成15年 | 21     | 34 | 45 | 59    | 30 | 11 | 46    | 35 | 19 | 69       | 22 | 8  | 40 | 41 |
| 現3年生 | 平成14年 | 10     | 34 | 56 | 72    | 25 | 3  | 19    | 44 | 37 |          |    | 27 | 34 | 39 |
|      | 平成15年 | 20     | 43 | 37 | 88    | 11 | 2  | 74    | 23 | 2  | 91       | 7  | 2  | 65 | 27 |

従来通りで習熟を行わなかった学年 (%)

**A 国語の習熟度別指導における関心・意欲・態度の人数の推移** (人)

| 基礎ゆったりコ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|-------------|----|----|----|----|----|----|----|
| A           | 14 | 16 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 14 |    |    |    |    |    |
| B           | 14 | 35 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 28 |    |    |    |    |    |
| C           | 14 | 22 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 32 |    |    |    |    |    |

| 基礎コ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|
| A       | 14 | 10 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 15 |    |    |    |    |    |
| B       | 14 | 33 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 21 |    |    |    |    |    |
| C       | 14 | 27 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 33 |    |    |    |    |    |

**B 国語の習熟度別指導における知識・理解の人数の推移** (人)

| 基礎ゆったりコ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|-------------|----|----|----|----|----|----|----|
| A           | 14 | 41 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 43 |    |    |    |    |    |
| B           | 14 | 23 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 25 |    |    |    |    |    |
| C           | 14 | 7  |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 6  |    |    |    |    |    |

| 基礎コ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|
| A       | 14 | 16 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 15 |    |    |    |    |    |
| B       | 14 | 33 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 33 |    |    |    |    |    |
| C       | 14 | 17 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 21 |    |    |    |    |    |

**数学科における習熟度別指導の成果**

次の表は、平成14年4月と平成15年4月に図書文化社・情報センタ - 作成の観点別到達度学力検査(CRT)を、平成13年度入学生129名(習熟は行っていない学年)と平成14年度入学生145名(習熟度を実際に始めた学年)のCRTの数学の各観点における絶対評価の結果を%で示したものである。(興味・関心・意欲ではA:意欲的である。B:少し意欲がある。C:意欲的でない。とし、他の観点はA:十分満足。B:おおむね満足。C:努力を要する)。

また、この表は基礎ゆったりコ - スと基礎コ - スでの絶対評価の(興味・関心・意欲ではA:意欲的である。B:少し意欲がある。C:意欲的でない。とし、他の観点はA:十分満足。B:おおむね満足。C:努力を要する)人数の推移の状況である。

【成果】

習熟度別指導を行った学年と行わなかった学年でともに興味・関心・態度はプラス方向に推移している。

習熟度別指導を行った学年の興味・関心・意欲は基礎コ - スにおいては基礎コ - スにおいては絶対評価のものがAとCの両極に分かれる傾向が見られる。

知識・理解において基礎ゆったりコ - スはプラス方向に移動しており、理解に時間を要する生徒にとっては効果があったものと考えられる。

習熟度別指導を行った学年 (%)

| 数 学  | 調 査 年 | 興味関心態度 |    |    | 見方・考え方 |    |    | 表現・処理 |    |    | 知識・理解 |    |    |
|------|-------|--------|----|----|--------|----|----|-------|----|----|-------|----|----|
|      |       | A      | B  | C  | A      | B  | C  | A     | B  | C  | A     | B  | C  |
| 現2年生 | 平成14年 | 23     | 46 | 32 | 49     | 31 | 20 | 31    | 41 | 28 | 48    | 39 | 13 |
|      | 平成15年 | 33     | 38 | 29 | 23     | 37 | 40 | 32    | 44 | 24 | 31    | 40 | 29 |

従来通り習熟を行わなかった学年

|      |       |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|------|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 現3年生 | 平成14年 | 7  | 26 | 66 | 14 | 38 | 48 | 34 | 39 | 27 | 44 | 37 | 19 |
|      | 平成15年 | 16 | 32 | 52 | 12 | 38 | 51 | 61 | 23 | 16 | 43 | 40 | 17 |



**A 数学の習熟度別指導における関心・意欲・態度の人数の推移** (人)

| 基礎ゆったりコ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|-------------|----|----|----|----|----|----|----|
| A           | 14 | 5  |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 15 |    |    |    |    |    |
| B           | 14 | 22 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 18 |    |    |    |    |    |
| C           | 14 | 20 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 9  |    |    |    |    |    |

| 基礎コ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|
| A       | 14 | 27 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 33 |    |    |    |    |    |
| B       | 14 | 43 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 37 |    |    |    |    |    |
| C       | 14 | 25 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 32 |    |    |    |    |    |

**B 数学の習熟度別指導における知識・理解の人数の推移** (人)

| 基礎ゆっくりコ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|-------------|----|----|----|----|----|----|----|
| A           | 14 | 13 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 11 |    |    |    |    |    |
| B           | 14 | 24 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 17 |    |    |    |    |    |
| C           | 14 | 10 |    |    |    |    |    |
|             | 15 | 18 |    |    |    |    |    |

| 基礎コ - ス |    | 10 | 20 | 30 | 40 | 50 | 60 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|
| A       | 14 | 56 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 39 |    |    |    |    |    |
| B       | 14 | 31 |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 45 |    |    |    |    |    |
| C       | 14 | 8  |    |    |    |    |    |
|         | 15 | 11 |    |    |    |    |    |

**(3) 選択教科学習と学力向上の関係に**

**選択教科と学力(学ぶ意欲・学び方・学んだ力)について**

平成15年度2年生145名は技能・芸能教科を中心に、3年生129名は認識教科を中心に選択教科を構成した。平成15年10月中旬に学力(学ぶ意欲・学び方・学んだ力)という視点でアンケート(1よくあてはまる、2ややあてはまる、3あまりあてはまらない、4全くあてはまらない)を取った。

ア 選択教科の時間の学習は好きですか。

よく(やや)当てはまる) (全く)あてはまらない

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 2年生 | 83% | 17% |
| 3年生 | 72% | 28% |

イ 選択学習の時間は選択に対し、初めに自分が思っていたことを満足してくれていると思うか。

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 2年生 | 61% | 39% |
| 3年生 | 54% | 46% |

ウ 選択学習は他の教科を学習するとき興味・関心・意欲を起こさせてくれていると思う。

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 2年生 | 44% | 56% |
| 3年生 | 52% | 48% |

エ 選択学習の学習方法は、他の事柄を学習するときの役にたっていると思う。

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 2年生 | 36% | 64% |
| 3年生 | 59% | 41% |

オ 選択学習で得ている知識は、他の教科を学習するとき、役にたっていると思う。

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 2年生 | 36% | 64% |
| 3年生 | 70% | 30% |

ア・イのことから、2年生では80%以上、3年生では、70%以上の者が学習に対して好意を持っていることが分かる。しかし、実際の授業とのギャップで満足感が持てる者が61%、54%となり当初の想いとずれる者が20%前後いる事が分かった。

ウから選択学習が他教科を学ぶときの意欲に影響していると考えているものが2年生で44%3年生で52%いることが分かる。

エから学び方が他教科を学ぶのに役立つと捉えている者が2年生で36%、3年生で59%いる。

オから知識や理解が他教科に生きてると捉えている者が3年生で70%いることが読みとれる。

また、2年生での音楽・美術・技術・家庭・体育の選択と3年生の国語・社会・数学・理科・英語の選択ではずれが現れているものと考えている。

#### 【成果】

3年生で行った選択授業の在り方は、学び方や学んだ力(基礎・基本)を付ける上では効果があると言える。

2年生での選択教科の在り方は、興味・関心・意欲を高める上では有効であると考えられる。

#### (4) 課題

興味・関心・意欲の向上は授業の充実等を進めることで伸びてきた。しかし、学び方や学んだ力の定着は充分であるとは言えない、今後3つの観点に関連を持ちながら向上していく方法を実践していくことが課題である。

習熟度別指導に関わっては、よりきめ細かな指導体制を再整備していく必要がある。

### 学力把握のための学校としての取組

#### 【調査の目的】

学力を学ぶ意欲・学び方・学んだ力と捉え、三要素がどのように変容するのかを調べるため次の諸調査を実施した。

また広島県の生活実態調査ならびに学力検査は2年生に限定しているため参考としながらも生徒の実態を掴むため使っている。

#### 【実施内容】

|         |                               |
|---------|-------------------------------|
| 平成14年4月 | 教研式CRTテスト(全学年)                |
| 平成14年6月 | 広島県生活実態調査ならびに学力検査(2年生のみ)      |
| 平成14年6月 | 広島県生活実態調査(2年生の内容を1年生で実施)      |
| 平成15年2月 | 広島県生活実態調査(6月に実施した内容で1年生に再度実施) |
| 平成15年4月 | 教研式CRTテスト(全学年)                |
| 平成15年6月 | 広島県生活実態調査ならびに学力検査(2年生のみ)      |
| 平成16年2月 | 教研式CRTテスト(3年生で実施予定)           |

### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

#### 1 研究会、説明会の開催実績及び開催予定

- (1) 日時 平成14年4月9日 PTA臨時総会  
場所 三原市立第五中学校  
対象 保護者  
目的 フロンティア実施内容の説明と協力要請
- (2) 日時 平成14年4月27日 PTA総会  
場所 三原市立第五中学校  
対象 保護者  
目的 フロンティア実施内容の説明と協力要請
- (3) 日時 平成14年11月19日 公開研究会  
場所 三原市立第五中学校  
対象 広島県尾三教育事務所管内の中学校  
目的 フロンティア事業推進の経過報告
- (4) 日時 平成15年11月19日 公開研究会  
場所 三原市立第五中学校  
対象 広島県の中学校  
目的 フロンティア事業推進の経過報告と研究成果の普及
- (5) 日時 平成16年10月末日 公開研究会予定  
場所 三原市立第五中学校  
対象 全国  
目的 フロンティア事業推進の経過報告と研究成果の普及

#### 2 研究成果の普及活動

##### ホムペジによる成果の普及

平成15年3月17日 山口県萩市中学校教頭会習熟度別指導に関わって来校。

平成15年11月19日 京都市と長崎県佐世保市より研究会に参加 (各1名)

平成16年2月5日 鹿児島県よりフロンティア事業推進のため来校 (1名)

次の項目ごとに、該当する個所をチェックすること。（複数チェック可）

|                      |            |            |       |    |      |
|----------------------|------------|------------|-------|----|------|
| 【新規校・継続校】            | 15年度からの新規校 | 14年度からの継続校 |       |    |      |
| 【学校規模】               | 3学級以下      | 4～6学級      |       |    |      |
|                      | 7～9学級      | 10～12学級    |       |    |      |
|                      | 13～15学級    | 16学級以上     |       |    |      |
| 【指導体制】               | 少人数指導      | T・Tによる指導   |       |    |      |
|                      | その他        |            |       |    |      |
| 【研究教科】               | 国語         | 社会         | 数学    | 理科 | 外国語  |
|                      | 音楽         | 美術         | 技術・家庭 |    | 保健体育 |
|                      | その他        |            |       |    |      |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 |            |            | 有     |    | 無    |